

空き家を農業施設に提案

都市の遊休地解消と農業者増へ

愛管株式会社・浜松市

【静岡支局】浜松市浜名区の愛管株式会社は、主力の設備事業のほか、農園事業としてブルーベリーやズッキーニなど16アールで栽培する。設備事業で培った3次元（3D）技術を生かし、空き家を小規模農業工場として活用する提案事業「AgriBimConnect」を今年に入りスタートした。

中村将義代表取締役(45)は祖父の代に始めた農業、父が起業した設備事業を引き継ぎ、現在、同社が経営するレストランや保育園で農作物を使うなどして農園事業の収益向上を目指す。事業を拡大するうち、不要となった事務所の利活用を模索。設備事業を応用することで小規模農業工場モデル提案事業につながった。

た。設備事業で使う3Dレーザースキャンのほか、コンピュータ上に作成した3次元の形状情報に加え、建物の属性情報を持つ建物情報モデルを構築するシステムのBIM、「デジタルツイン」の技術を使用。収集した空間情報を基に、農業設備の効率的な配置や収穫時期・収量予測などのためのシミュレーションを行い、農園事業の蓄積を生かして栽培を支援する。

同社農業課の宮下裕行さん(38)は、この事業の展開を見据え、狭い空間でも収量が期待できて単価の高いエディブルフラワー(食用

花)やハーブを中心に栽培試験を進める。浜松市中央区の浜名湖ガーデンパークで6月2日まで開催中の「浜名湖花博2024」では、自社レストランのシェフが食用花を使用した食品を提供。宮下さんは「パンの一種である『ポップオーバー』を米粉で作り、食用花を添えた。見た目も華やかな特別メニューを、ぜひ会場で味わってほしい」と話す。今後は他品目の栽培も試行し、支援の幅を広げる予定だ。

地域の課題解決にも積極的な中村代表は「都市部では遊休地などが増加し、農業従事者が減少している。この事業が少ない初期投資で新規就農を促し、地域活性化や環境問題などを解決する手段の一つとなれば」と話す。

▽AgriBimConnect専用ウェブサイト

|| <https://i-kan.co.jp/agricconnect/>

(角田)



エディブルフラワーの生育を確認する中村代表(左)と宮下さん



BIMによる小規模農業工場モデル